



復讐

月氷奇縁

三

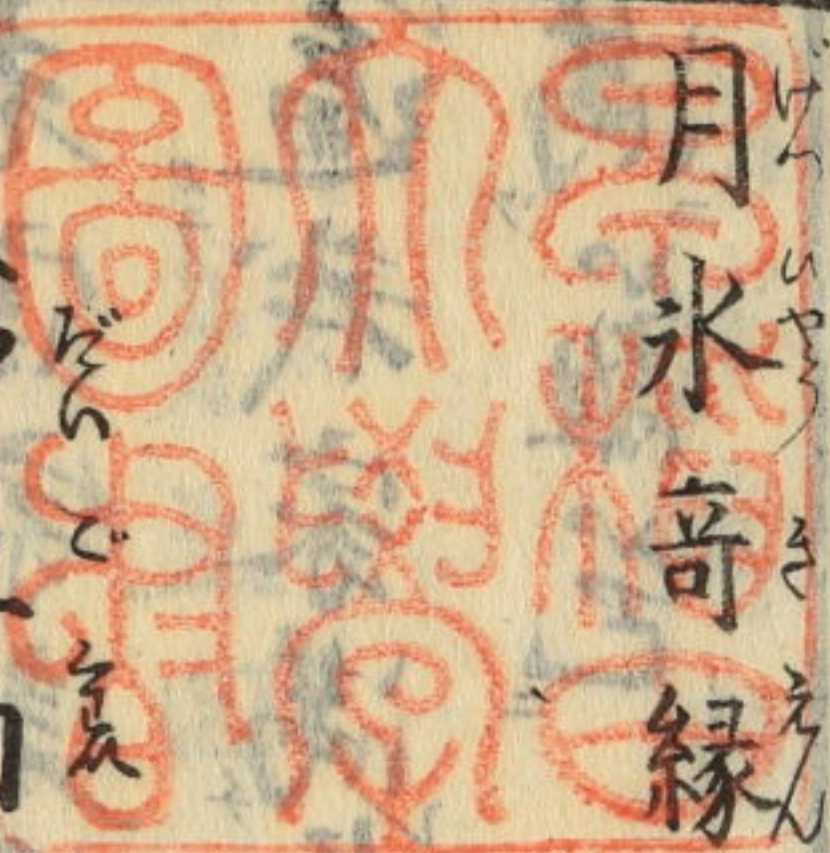
^ 13
3103
3



門へ13
3103
3



月水奇縁 卷之三 目錄



第五回

驚おどろ二に獼い猴ま一いち 倭やまと文ふみ 憇いそ二に茅やぶ簷のき一いち

逐お二に野や猪いの一いち 武ぶ漢くわん 登のぼ二に雪ゆき嶽のぼり一いち

吉きち埜の河の 枯こ樹じゆ 滄そう漚じゆ 春はる

妹いも夫せ山やま 壽あひら松ま 親おや折をり風かぜ

第六回

月水奇縁

卷之三

昭和九年
七月二三日
購

第三篇

和州吉野山

極精骨董是
山花白似徒
文未似紗大
老官宗多不
遍我家滿屋
滿離芭



月水奇縁卷之三

東都

曲亭馬琴著編

第五回

驚猱猴一倭文
憩茅簷
逐野豬一氏漢
登雪嶽

斯て暇も夫人へ倭文を琴ひたるは日日夜夜徒洗みく走ぬひが
やうやく顔姑峯笠柄を經く歌長已ふ遠かりけれはとめて龍の腮を
逃たるあらしく都を望て落紗ぬふ荆棘路不横ア〜ハ足破爛て
血をるが〜。溪泉前小漲ア〜ハ卷石小跨て魂をら〜ハ百歩をらめ
ハ百歩勞は二里を〜ハ一里やむ倭文精婢〜ハ抱中ぬるせよ
を掖腰を押しとかくを駿河州ふりぬかくてそ人れ疑ひやおひる
んとあちり装を更て村婦の伊勢宗廟不進香をるかちらに

拾て墓笠小面を匿し。袴小白布に淨夜を被て足小夏布の裏
脚を結び夫人玉琴一般小装束志多バ倭文も遮目笠ふらぐや
らち戴身小荒布に襦袢を被て腰小両刀を跨り。時々季冬
小く朔風層を犯し陰雲雪を結て寒氣堪ぐ。笠い小似
て戴ども富士を又取ふりなく杖を足高をたきけて歩ども裾野
小遠し。花洛のうらむらり遠にゆりて三河とさバ氏夫れ
矢矧の橋もありあらず。見れ軒蕭も歎くと強に虎の尾張も踏こえ
て竹れ都路程ちるを嘯ぶ。あま神風の伊勢に驛路の鈴鹿山風
小纏つり。雨小沐ひ一條の客路萬里に山河るるとるどく
を傷し矢多とる總て賜をき川已小近に路よきりて竹人小
京都に光景をとる。都も近曾山名細川が確軌ちりて合戦止

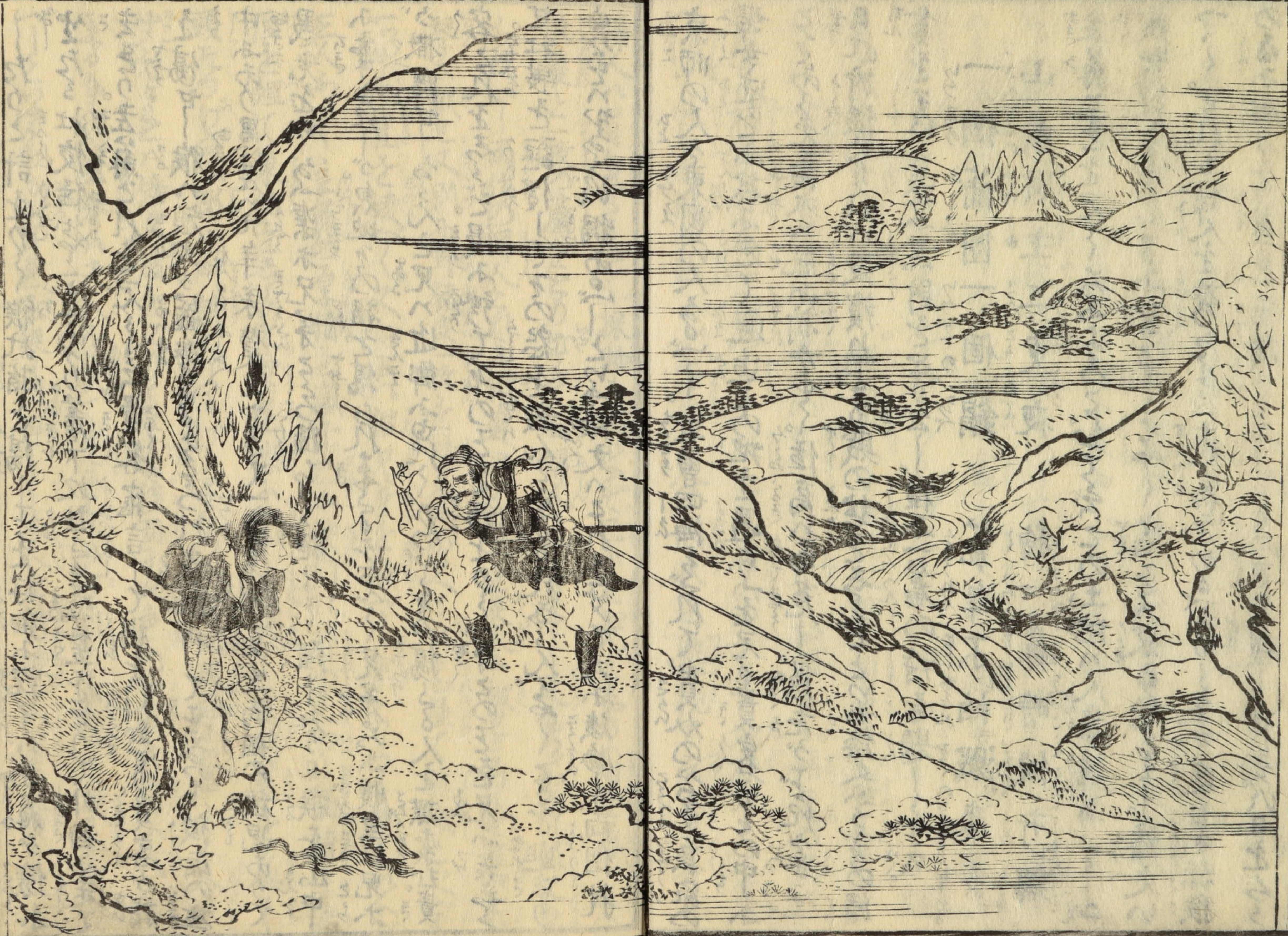
時あていと騒しといふとる歌をた。とまんとする小路を歩ひく人
とま小家もあし進退と小窮ぬ倭文夫人小言人今の世の人とる。
笑れうち小又を匿せば都ととも憑が。臣が父和州吉野の藤六田
といふとる小あり。元邊邑に寒士といふとも大正義氣あひれり。姑
彼首小身をさそく都の形勢をさ定免緩小奉をさるりぬら宜
か。一と言夫人のさるく。とまや万里の身の繫る身れ如し。たす
石もさるんく。一ゆらう。彼古今集も。
みゆの山れある。小富も身れら。時のかくれ家小せん
とらえたり。もか。時小こそあめと。うち後てさえぬ。玉琴こまを
さて忽地嘯と思け。六倭文おろれてその故を問ふ。玉琴いさ歎
てい。さ。父母も大和に里人ふりて。同胞もあり。さ。ハハハの

幸遠く東路にゆきまゝに幸ひて夫人の鴻恩をわたり深窓小
 中あはれて種痘類なく。昏々耕をつらねて食一夜の綿衣を襲て
 榮耀身小あまふほほくもあはれ父母老くく。所ての情竟てらん
 光陰つゞふ十周年を獲たり大和といど家路も祥あつて父母同胞
 の面影だふあび今もあつたも故郷ふるふるあつて却父母を訪がごと
 死いえう常なることいふる人の數老入ぬひけん天神守擴らと
 地裡も指られかみ浮世を獲とふと潜然とく思けは夫人練
 てのをまわくやよ玉琴歎とふれ父母世やあふいでめり會ざら
 ん。こゝの頂目你お二人に模様をえく情由あるとを志れり是年
 庚相應の夫妻あり今もこゝの媒して你を俵文小妻とす。一。俵
 文小舟眉て貞操を竭。父母小幸れせむいふとこのは二人の

只顧頼ふ汗。あらく夫人の恩恵をさるる。こふ於て都へ入
 してあふ大和を望て走けは西之目を獲て吉野に籠らくるぬ。
 柳大和河内の際山あはれ路險。深谷地を帯て崖岸の形を觀金
 空高山領天小横ア。幽岫の勢を刀削せり。向ふの青壁萬尋不
 なく直下の碧潭千仞ふる。この日八九里の路を走て夫人玉琴
 大小罷病いまへ一步もさむびがごと。俵文所なる林の中ふ心靈廟
 ありをえく。門扉をむらけ婦女を從を敬せおのむ樹下の石ふ
 腰らうけ刀を脱て肩あふ倚りけ。さるる四下を眺むは凶林の裏
 机を差し。香木に同鼻樞を得て只竹とるく物さ。時小願
 邊ふ直利といふ音して俵文が刀おのづら韃をさるる空中小閃に
 昇刀鞘のさるる小のさるる是いふと慌つ梢を佇見をば一隻の白毛

猿猴かの刀を合せて樹とあり。倭丈大不怒てこの畜生何ぞ人ふ我
 やといひつ砥して驚せむ。猿はこゝろ不怖ましく枝より條ふつこひ妙なり
 梢ふらつとと終み刀をさるまきて倭丈こゝろく焦燥て云渡ふ死虎
 生氣不及とといふとあり。今この身深客とるをりく禽獸ふせう茂
 らぬ氏夫戰場不怯器をさうらふまき差とひ況畜生のるふ腰刀
 棄て何の面目ありんと。巻を捲齒を切り。杪とを夜視て立居
 たり。夫人の玉琴とてこの声そのをさめて山靈廟よりさうり出
 この光景をえくおぼれあふも竹なり。玉琴のさうり。あれを
 登りて走らせるが是賊小糧を齎むるなり。只賺して復あふさうりと
 徐不樹下歩より身を抗て猿をさひけい。猿も又身を抗て人を指
 倭丈こゝろをえくさうらふ一計を生じ。身辺の中刀を抜て假ふの

指を切かちをさうてえせられ。猿も又うの白刃をりくさうら
 その指をさるふ忽地指さる。二ツ刀ふさうらうて班と墮。猿ハその性
 血をえくおぼれあふも竹なり。玉琴のさうり。あれを
 去ける倭丈からうさうら刀を復しけり。時刻既ふらうらさうら下睞ふ
 おさうり中途小日をさうらさうらいふせん去来走ぬと促つ。是れ
 けり。路をさうらふ同雲。健算かさうらう。天結陰雲。霏々と降出
 一着遠山不限。鶴の川より。老樹ふ玉龍の蟠がどく。ほりぬ
 市とい狐村ふりれ。日已ふまき。香る林の裡ふ一軒の白屋
 ありて燈の光隠くと見え。三人むとく。彼廂ふ走つ死てえれ。柴門
 半を死て一個の老翁。摺を地炕不折。焚つ。一個れ。仕伎と對せり。
 倭丈唯門さう云。是れ六田さう。過る。客あるが中途小日をさう



したりと計をりく。猿れ指を傷して。ま仔細小鏡。了は左將が傍小
 坐たる。壯俊猛勢と立あがり。簷下に掛る。裏堂をとりて。外面小走
 去まり。左將これを入り。云。貴客。寤言して。禍を引出せり。貴客が指
 を傷せ。猿へ。頑犬が寵愛。まよと。これ家狙りて。まよら。彼病の極
 中。小あり。愚差へ。十年未。楚となりて。一歩も。門を。出で。兩個の。頑見ありて
 愚光を。や。あ。渠。ホ。兄。弟。ら。ろ。猛。ら。ろ。絶。ま。ろ。強。一。今日。猿。を。山。中
 小。牽。ち。死。が。忽。地。の。指。を。傷。れ。ま。ろ。と。ま。ろ。兄。弟。た。小。憤。里。れ。兄。ホ
 が。撒。渡。せ。あ。え。んと。見。へ。近。御。小。あ。れ。ろ。ろ。の。傷。る。人。を。探。索。む。貴
 客。これ。を。ま。ろ。ど。漫。小。務。て。ろ。の。正。を。張。を。り。く。第。二。の。正。を。見。ふ。ま。ろ
 せ。社。醫。を。誣。借。して。ろ。の。怨。を。敷。んと。ま。ろ。れ。ま。ろ。人。を。ま。ろ。こ。ま。ろ。逃。去。り
 ぬ。ま。ろ。か。ま。ろ。に。禍。あ。べ。と。い。ふ。倭。文。ハ。これ。を。受。て。大。小。後。悔。一。兩。個。れ

婦人の眉意する。探物も保あむ。已不立。男と。ま。あ。小。耐。左。將。一。枚。の
 敗。簑。と。一。枚。の。蓑。と。そ。り。出。して。云。婦。人。の。ま。ろ。ま。ろ。走。ま。ろ。か。ま。ろ。に。兄。弟
 ら。れ。べ。一。兩。位。の。婦。人。を。被。ま。ろ。ま。ろ。蓑。を。失。人。小。被。せ。ま。ろ。ま。ろ。せ。蓑。を。ま
 琴。不。被。せ。又。別。小。野。猪。皮。一。枚。を。倭。文。小。あ。て。て。云。是。極。て。醜。織。と。い。ふ。
 一。つ。ま。ま。靈。を。凌。一。く。又。一。つ。小。の。彼。兄。弟。を。欺。一。一。率。ち。り。ま。ろ。と。い。ふ。ハ
 三人。あ。ろ。く。ま。ろ。の。厚。情。を。感。ず。已。不。柴。門。外。小。走。知。ま。ろ。積。塵。踏
 徑。を。埋。て。東。西。を。ま。ろ。ま。ろ。靈。花。襟。小。入。り。頭。冷。く。一。靈。吹。笠。を。扇。り
 頭。た。白。げ。り。十。町。許。ち。ま。ろ。ま。ろ。忽。地。後。面。小。置。くと。人。声
 中。え。ま。ろ。ハ。倭。文。後。を。ろ。り。ま。ろ。云。後。面。小。人。声。の。少。さ。ハ。當。小。我。を。逐
 する。ま。ろ。ん。玉。琴。の。ハ。夫。人。を。扶。て。先。不。ち。ま。ろ。れ。ま。ろ。小。あり。て。渠。ホ。を。防
 ぐ。と。い。ま。ろ。ち。も。心。甘。ま。ろ。玉。琴。精。悍。一。く。夫。人。を。誘。掖。素。靈。を。踏。て。走。去。

倭文少刻望羊て追人をまらふものぢの寂りて人の善正なけむ
あつてころろを安ト。あふ夫人の蹄を慕て走らるが恨行けん遂ふ
夫人を琴ふふあつてころろ忙てる頻不走りふ忽地足ふ一片の絹
捕前けむあつてもあつてふ女服の片袖を天免膝朧了て
模様分明あつてとどろも玉琴が袖服に袖ふ髪髻よりあつて
ほちくむらびむ。四下不睛をころりて熟視止む彼首す々毛髪散
乱。是首あふ蓑衣の敗たるあつ倭文これをえらる胸膈割がどく。
天を仰て長嘆。一軒前門虎を防は後門狼をむま人玉琴ふ
客のあふ教うと更不疑へむと吾恨て夫人を虎兇不陷を足
あつてあつてを救とあつて今い何をう期づ死と腰刀を抜て既不
肚不傳人とまらとまら不忽地溪間北着竹瓦碎とらて一隻の野

猪鷲直不走。東南北山嶺を登て去不けり。時ふ一個の獵夫頭
あふ席帽を戴身あふ煖袖の短褌を被て足ふ草袴褌を穿
ふ一條の竹槍を會て。乾の坂路ををせ下る。倭文ハ野猪のあれ来
たり。おとろにのきむをさるゆがあつてが雪明不彼人を透見
ておとろく。この賊夫人と玉琴を教ぬふらふがひや。逐引をて
討ふやとかの老翁が贈たる野猪皮を被り諸備不伏てころろ居
たり程をく獵夫うてまら。倭文をえらる野猪ありと勢ひ槍
をとり伸て刺人とまら。倭文岸破と起老賊何ぞころろ
殺したるやと罵つて刀を揚て破人とまら。彼人急不發をのく
遮るめ壯士あつてころろまら。びは是ころろ見倭文あつてと中と
あつ倭文の声をす晴をさる免てこれをえらる不氣家足赤糸

治まりけしむべしおどろ死鬼地刀を専と投てて地とふれ伏し。不
考れ見事ありて父を害せんとせしもの罪万死もする所候しといふ。
孝郎治倭文を懸想く云世面とふ怒氣あつる。何ふりてや
慌とせ倭文云今夕この池ふれて主君れ夫人殺されぬ由ふ
乃の仇を報んとせしもの事希治とて何ぞのく夫人殺せぬとい
ふや。倭文云ふ女の所袖と敗衰あり是夫人の被ぬひ。衰あり又
毛髪路とふ散乱せり是夫人殺されぬひふあやむや事希治めれを
守守を拍て呵くと笑ひ世徳角のころも鎌倉ふりて。この地言の
事とせと九大和河内の間流夫猪狼を捕人とせり。あつる夜ふ
これの物を踏とふ捨おれてこれを誘ひり。猪狼これとて近邊ふ
死人ありとせひ。その屍をさうて平坦ふりて紋ハ指と殺或ハ

射ころし刺殺とて又い見を野猪ありとして刺んと。子ハ父を賊と
とて歎くんと死危く。昔時周の刺子鹿皮を拭て廉辟ふ入。
獵夫の箭とたをのぐと一孝あり。汝ハ猪皮を被て。さか前ふり
ひん思ふり。まは道曾憲忠滅亡の事を少て。母ともふあう。世と
を無ふあう。今夜路ふ兩個の婦女ふあり。言結東國の人をを
りく心うさむ。彼首れ松下ふ想せぬ。是憲忠の夫人あり。一
とや。彼處ふいりて見なれといハ倭文云ふ。あつる。父子うち
つて。そのころふり。中途又ふあひ。たるとを説語ハ夫人も玉琴
も。孩児の母ふあり。とて。あつる。あつる。あつる。あつる。あつる。
雪中の長途ふほろとあり。これ二毛をさるとい。さも。常ふ山林
を家とせ。歩り。後あり。これ夫人を負せ。倭文ハ侍見を

扶掖て来るといつく。其常治夫人を負たておるといふ。四人むろく
路をいふに。六田此郷ふたがりつたぬ。

第六回

吉野河枯樹海遭春
妹夫山壽松親折風

猶又其常治の膳も夫人玉琴も引て家不之り。老妻刀自と
吟て夫人をぬかせ套房不姓を懸して夫人を息せまうせむ
刀自俄頃不履具を借て夕餐をさる免官電厚少の親子三人
堂を占て十年別離の苦乐を慰けり。刀自ハ世不嬉しげ不倭
文が身後を極ていつく。你が總角のころ鎌倉不ありしに
方。只まろく此音耗をさげどその面貌ハ夢不さるべろの
とくわりのと一が射慈かる丈夫とるなりと鐘を言語不ありハ

あるハ慈母此情るるべし。其常治轍然とていつく。これハそのち
たえて豚見不あり。不去歳鶴岡應神廟糸緒の序をえ
渠が第宅不あり。已不の成長しをさる。由不今宵中途不會て
そくく見るをさる。かるとるく。送不骨肉をわさる。一
と山中此をさる。備細祝儀ハ刀自おぼりてそのを奉をさる
むけり。其常治儼然とていつく。倭文ハ幼稚より憲忠不使
て君恩むろけし。君家此る不ハ死をり。忠を想とべし。
あつふ不世に用女兒を携へるを是何とぞといふ。とげあつふ
由倭又つとていつく。父の言さると不情とぞ。渠ハ海部大膳が
養女なりといふ。そのころ倭父不似ぞ。忠義の志あり。よく鎌
倉没落の刻より夫人不従ひて今よの不本をり。其常治頭を揮

て云 你 爽利と云ふ思慮も深しうぞ 女子のあつらひ一定あらず
 のあり 特ふ大膽も乱軍にぞ討せしとや 架橋小忠義を竭
 密に假父の仇を報んとするもあらず され今渠をよむはして
 誠と聊もその言語濁らざれば 額を極く暗跡と云ふ 休そ
 のとれ 只一刀不砍殺し 速に後の患をきろと 既一刀自と
 りし玉琴を吟来し 倭文の父が言をゆかり 拘らざれば
 る海鳥の工を言解人とせしが せりし人今懇ふ実をゆかり 告は
 父母希まれ色も迷りとせむらん 又いざこれハ玉琴をこそと
 一左せん右せん と賜も新くむらり 迫ふ套房のるを父と
 ハ玉琴刀自小誘ふとく 希治が面前小坐して 倭文吐嗟や
 刀夾ふ身をむけつとも 一たび父を瞻又一たびハ玉琴をこそとゆ

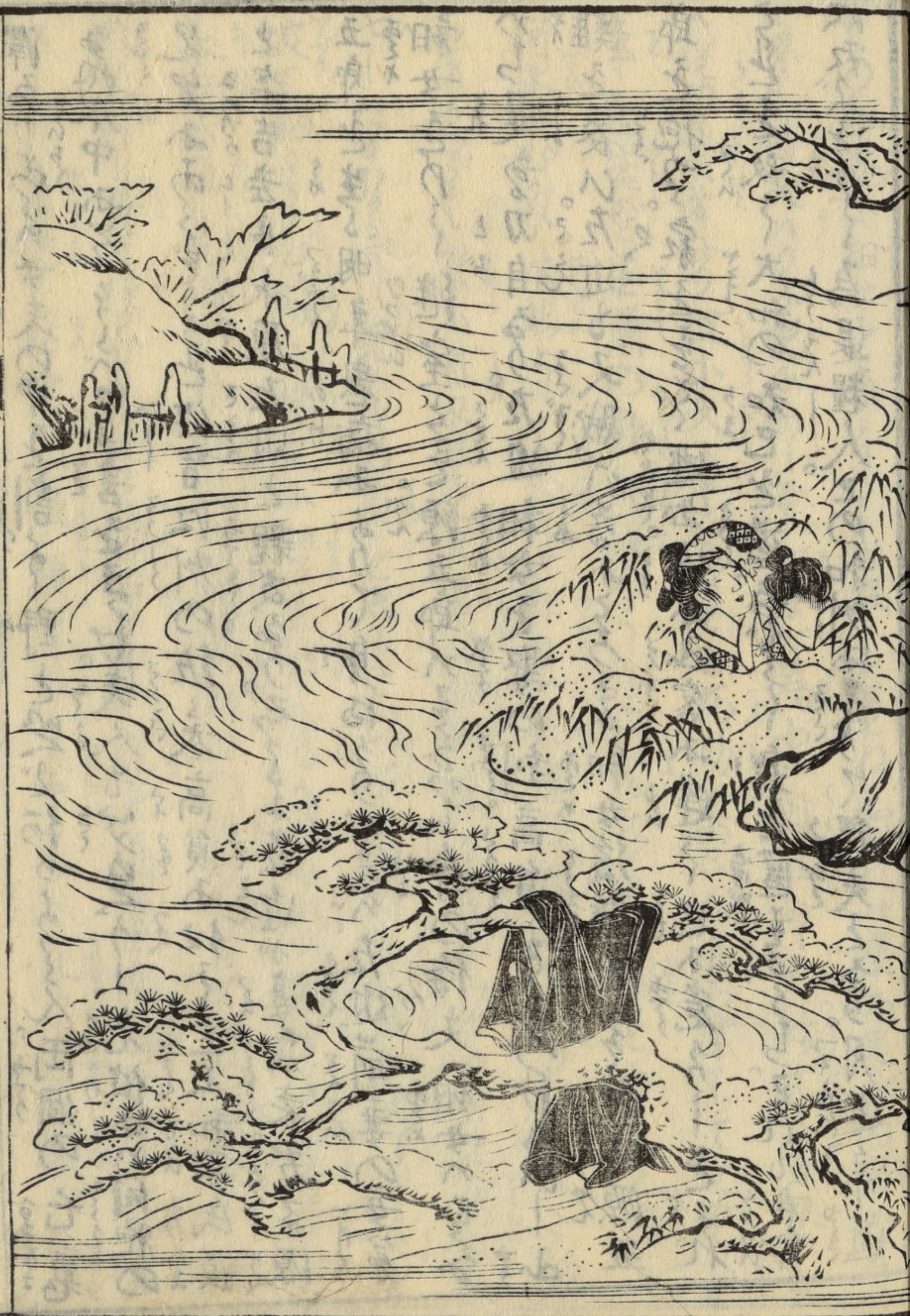
りの今や一語の向き不坐死の際を定るうと 眼底小涙を合
 又今暗跡をこそ居り 希治廓體も玉琴あつらひ
 愛姫ハ海部氏小養をゆひとて 假父軍中不討せむらん
 こそ方便あつらひとて 玉琴微笑して かくも大膽不養を
 一ハ僅期月のうち中そ 一月のうらみとをうけと 只夫人の思は
 そいと深けき由もいとあはれに 母もこの大和の人ありしが
 こそハ幼稚と死野人小句引も 遠く東國不替心死しを幸
 不慮忠の君所不あつて 人となるほど 父母兄弟 面貌たふさ
 むり されあつらふさ 女児をうらむと といふは 父
 ぬきさすやと といふも ちやうど 流ぐり 希治夫妻これをして
 稠眼色あつた 父母ハこの州の人を かくおとされ 村掬され ちや

其ハコガカレ不也死あり。父母此死志と志死ののやあると云ハハ。玉琴
懐中より和綿の符符見をとり出し。この裡小脛帯ありて永亨
七年十一月廿米の日女見照子とあるせり。是る二親の死志ありと
以夫妻慌しく符符見をとりし。死志は紛々たる死コガカレ
是ハ女見ありありけり。其父母娘よくおのまかて逸ふらざる
つ且よろこび且るげく。少選ありて香糸流云。呼見見お過世い
る終ありて。新憲忠に陰恩ハかろけり。只命のわえかきま
更不忘ぶ。心とろろい。そて又由倭文ハこの光景をそく。又も只
然として誓ふとあるごと。刀自ハ袖の涙を拭ひ。都し今夜
いある吉日やありけん。倭文を奉りて家ふるの。生別せし
子不あひぬ。十年別離の苦楽いそ。一夜不眠。濁人も夜もひき
更たり。寝つて話すと。天不飲ハ地不産。父母ハ所房の。由
由にぬ玉琴ハその背影を月送て。倭文ハ身辺ふる。を
を吞て歎け。は倭文つと。席を避て。云と。さ。は。何
る。そ。新。み。び。り。か。り。死。れ。も。幼。と。死。女。弟。あり。て。世。を。ま。り。せ。し。と
と。少。が。か。ろ。こ。い。ハ。少。も。及。び。父。母。い。ろ。ま。は。は。由。ら。り。も。実。を。は
若。あ。ぶ。る。一。銅。鐵。の。精。ハ。磨。て。も。み。る。身。中。ハ。鐵。ハ。淨。か。し。
兄。弟。已。不。禽。獸。の。ま。り。を。ま。り。今。ハ。い。ろ。悔。も。ろ。ろ。ト。只
速。不。死。と。と。と。遂。不。腰。刀。を。扣。ん。と。せ。が。これ。を。又。い。つ。と。
是。ハ。こ。れ。父。母。の。賜。り。父。母。い。ろ。鳥。獸。を。ま。り。と。も。賜。人。や。身
將。不。死。ん。と。て。る。月。人。倫。の。死。を。遂。が。し。兄。弟。吉。野。の。川。に
投。て。あ。く。妹。夫。の。中。を。さ。う。ん。只。恨。と。ろ。二。親。と。若。て。君。家。又

更たり。寝つて話すと。天不飲ハ地不産。父母ハ所房の。由
由にぬ玉琴ハその背影を月送て。倭文ハ身辺ふる。を
を吞て歎け。は倭文つと。席を避て。云と。さ。は。何
る。そ。新。み。び。り。か。り。死。れ。も。幼。と。死。女。弟。あり。て。世。を。ま。り。せ。し。と
と。少。が。か。ろ。こ。い。ハ。少。も。及。び。父。母。い。ろ。ま。は。は。由。ら。り。も。実。を。は
若。あ。ぶ。る。一。銅。鐵。の。精。ハ。磨。て。も。み。る。身。中。ハ。鐵。ハ。淨。か。し。
兄。弟。已。不。禽。獸。の。ま。り。を。ま。り。今。ハ。い。ろ。悔。も。ろ。ろ。ト。只
速。不。死。と。と。と。遂。不。腰。刀。を。扣。ん。と。せ。が。これ。を。又。い。つ。と。
是。ハ。こ。れ。父。母。の。賜。り。父。母。い。ろ。鳥。獸。を。ま。り。と。も。賜。人。や。身
將。不。死。ん。と。て。る。月。人。倫。の。死。を。遂。が。し。兄。弟。吉。野。の。川。に
投。て。あ。く。妹。夫。の。中。を。さ。う。ん。只。恨。と。ろ。二。親。と。若。て。君。家。又

危窮存亡の秋あり。この身君父不仕とあつて恩をのり
仇とて汚名を千歳ふのこゝろとつるる過世れ業因ぞ。お琴
ふとをさめていゝ歎く。身幼推より父母不損らむ。
成長て又とたのむりの多き君を職する逆徒あつて偶牽糸の
縁をのりて之を兼段玉不倚よつて言結同歩兄弟夫婦お
らんとて天上月差したのこがく。地下の氷人も何うせん出雲別
あつとて座霊も寓言くと或はうらうらと或は槍。うら乱るる
あり。附不遠寺の鐘声ささえて誰かふるふを常を不とま
やふ死とアと。倭文両刀を腰不渡。紫門扉を押し死。二人
吉野川を登りて走ける。白雪秀壁ふらうらうの里に
あつるまゝと縁たりも。かゝる附節とあつて走つて白雪不

跡を仰し。跌て白雪不體を彫。既ふ吉野の川上ふありて。白雪不
とぞ。が倭文河水ふるる衣とアと。云是錫服御前あり。こゝを
被て死ると死へ死後を何君へのおそれありと。こゝを脱て川上は松可
投かけ二人。佛名敷声とあつて身を躍せし水中に飛入んとせし
をりし。も忽地後面白火の光閃て彼處あやゆえん。是処あ走ると
白雪声の方ふ二親あり。屍をえこるも辱し。志をくつひるるを候て
死とぞ。二人遂に枯葦に裏し身を潜め路を幸て彼首をえ
と。バ。秀郎治蕉火を担て先ふらうと。刀自は夫人を誘。掖狛狂れ
て。く走來るるが。やも松の抄ふ衣を挂たるをえり。三人声を放
てて。哭ける。少選して。秀郎治。つらう。ア。や。二人の已ふ水中ふ
溺死せり。吾妹子が寝るれ髪と人丸が縁たりし。も共ふ大和の猿



澤よりあつた女夫の中を割り野とせど何うも人兩個の亡魂
み舟水中にさかすべりか言をまじけ夫人も少少う。元彼おの同胞の
兄弟おあつてとせと昔江州の佐木高負お仕る之上和平氏漢
と名吉老長永原友近と親友あり。あつた友近が毒唐衣男子源
五郎を生る明年鬼病おありて身ほりけしは友近前毒の女弟
相女をのりて継室とせと源五郎はさつら今の倭文相女はさる
わら是る刀自る友近相女を娶の刻高負よりあつたひい山
雞を喪ひ友近も又賊れおろろさる。相女後難をせとせと源五
郎を抱つ。家をとせと逃お途お山客お逢く。己お危ろくをこれ
こそを救く大和の知己を憑おせとく身を匿おろく。これ君命
にたふをりて為退糧人この和州おありて親夫とさる。月逝年逝

てのち遂お相女を妻とてお琴を生ぬおくれは渠お兄弟の名は有
あつた倭文はりか見おあつて。相女が為お内姓おして倭文とお琴と
へ從母身あり彼お夫妻とさる。何妨おあつた人吾あをせとてお中、此
奉を告げ生前の歎死後のうらみ。何うおと増とあつたと漲落
河水おむひ法然とて男。相女へ記念の夜を抱おひせとせと
あつたうらみ。渠お自又せとて又君公服御章を脱おけつ。お身を禽獸お
比へるおとせと。見おあつたの羞をさる。とせと。お母へ却羞をさる。とせと。お負を
破ておまが嫁も。倭文お難言を討人おる。これお幼少お官遊せ
永原の姓と憚て外祖父熊谷勘解由の姓を冒せその成長をた
のしけ。お母がねお泡と消掌中の珠をさる。お挿頭の花をさる
せとて左腕て枯おぬ強顔おける命と記の衣を脱お當

只管うらと歎けけは夫人も渠おが心中を猜多し涙袂を湿り
 時小枯蘆葦をうた分は、倭文玉琴をふありと汀の辺に走らば
 二人をとりて、奇嬉しき死にありけり。とあり、いよを携袖を
 扣飲喜催躍うたて、倭文父母の前小跪て云ふ孝の子蘆葦の
 裡小ありて二親慈愛のふたを感し、てて天を載る、誓いのこを
 あり、柳が父の仇とて、看何人か、相女とて、休の父暗撃ふる
 此のい何人の所あるとて、あふ、その仇をたふさるあふ、争ひ
 まく、若き人、只玄丘の明鏡を花せる、是は父の仇とて、さす
 倭文勃然とて云、父命不たして、その怒を、空とあつ、たふ孝
 是より大あひ、たふ仇人知ありて、夫小匿と、隣ありて、海小潜
 とし、肩を挽ら、死んで、死やいと、面色変、て、憤ける、和年と

此を又と云、倭文、い、か、熱ひ、た、近を、教、せ、め、の、ハ、い、れ、る、り、と
 いふ、衆皆、或い、か、う、死、或い、疑ひ、共、呆、て、相、然、う、和、年、又、い、く、
 色欲、邪淫、の人を、傷、や、賢、愚、を、と、と、と、と、孔子、の、危、も、易、と、教
 釋、氏、の、五、戒、の、と、お、わ、く、吾、む、り、相、女、を、眷、恋、し、て、あ、は、を、娶、ん、や
 我、う、ち、た、近、相、女、を、り、く、継、室、と、い、ふ、子、終、う、つ、か、計、較、た、ら、ま、ち
 艱、難、一、遺、恨、と、い、ふ、止、と、死、を、終、不、朋、友、の、信、義、を、忘、と、定、竊、た、近
 を、喪、ひ、て、相、女、を、妻、と、せ、ん、と、を、計、る、る、の、ろ、ろ、大、津、小、石、見、太、郎、と、い
 退、糧、人、あり、渠、う、く、向、謀、の、術、を、得、う、と、ぞ、と、あ、ら、石、見、を、か、つ、い
 て、た、近、が、仇、手、と、ま、ろ、の、小、雞、を、殺、せ、せ、あ、は、を、跟、と、り、て、た、近、不、自、教、さ
 せ、ん、と、ま、時、の、正、長、元、年、八、月、晦、日、石、見、太、郎、不、肉、意、し、て、志、賀、此、属
 城、小、謀、と、る、小、雞、と、ま、ろ、人、渠、の、賤、料、あ、り、て、その、夜、軍、須、財、數、万、金

を偷し且玄丘の宝鏡を奪ひて山雞を傷し。終ふ友近を教害
して並ふ江州を去せり。さきども一たびの病志を遂たれど
恩をのり相女が節義を折れ。こゝを妻とて弱子源五郎を養
育す。自他親疎のつらあり。鍾電日ふ保倍邦念忽地滅して
遂ふ源五郎小針とんとおのむ。渠を氏士とせよ。縁故を
のり免て鎌倉小針とる。不落魄なる一衛士の資料を弁がてく。
女兒照子を木柵術不賣人と平城不買人中途照子をえう。むて
多事あはれ却女兒小生つらと既ふ天罰れ身おらつくとを曉す
あつこのとを匿し。おのむらうドてその資料をそののれ今日これ
の事死もつれ日あり。紺倭文速小これを討て亡父の孝養おせよと
よ。玉琴の只顧泣あつて既をだふ奉ど。倭文つらと。和平が鏡

結と聽てし。假令亡父の仇ありとも。十余年養育れ恩あり。無
双不覺つれ且父を殺すのの石見太郎あり。渠を討て足るんとい
ふ。不覺とむ。さきども肯ぞ相女猛怒とまあり。倭文が腰刀を奪て
引抜亡父の仇當知らうといひつ。和平方肩先二寸許傷その刀を以
自己が肚小傳し。衆皆さへいふと驚てこゝを勒る。相女息を
吻とつ死てし。前夫と一旬の親あり。後夫と二十年の恩あり。
恩をのりといひ。何ら重とせん。さきども公道をのり。論じんが
後夫の前夫れ仇人あり。いそ一刀怨さるん。既よその貴針お階し
を去る。雙言を復んらて却仇家の婦とる。生れ死して前夫不
罪を賭がて。活く。見お教不言。さきども。後夫不傷を
前夫不射し。更小自刃して。後夫二十年れ恩不携ふ。や。倭文速小

石見と申人を討て孝道を金せよ。又お琴みりつて。今より後
 休いこと見おあつて。父をぬく。父と云ふと云ふれ母をぬく母と云
 わけいそ。う。倭文ふ舟眉て操を操つて。倭文も又渠が孤と
 ろりしと云れ。生涯にさつと云れ。と云声もゆりつ。鮮血
 滾くと漬白聖却て紅不變。どお琴の恩言をさつて。ゆふ
 養ふと云つて。身を聖中お授うして。聖より先お消人と云る。おれも。
 和平この光景をさつて。云。相女さつて。候吾今下土の御導定一
 昔時拈華左師との羽佳。此宝剣と云丘の鏡をた近みさつて。
 一篇れ。傷をさつて。と。少羽佳。はさつて。瞿より吾前。此雄の山
 雞をさつて。今又夫妻。瞿の劍不死。因果亦復か。れ。今也。
 倭文の腰刀。はさつて。聊孝道を完と云。と。相女が。り。も。
 刃を抜と。り。と。つ。つ。肚をく。破。相女を抱て水中。お。び。入
 たり。三人吐嗟と。さ。う。ら。紅波。俄。頃。ふ。さ。さ。り。て。相女が。骸。い
 妹山の方。お。あ。れ。和平が。屍。い。夫山の方。お。漂。ひ。着。紀。の。磯。お。る
 が。れ。く。て。お。を。さ。つ。て。と。さ。お。及。ど。古。今。集。ま。る。人。さ。さ。つ。て。
 む。さ。さ。て。い。妹。夫。の。山。中。お。あ。つ。る。の。河。の。う。や。世。中
 是。を。の。く。これ。を。唯。い。は。古。人。未。来。を。祿。さ。る。お。似。り。揚。震。が
 四。知。う。云。天。知。地。知。人。知。我。知。と。夫。隱。隱。ハ。且。身。を。利。と。と。の。も
 天。中。と。と。あ。い。後。人。和。平。が。と。を。の。く。自。戒。と。と。一。待。り。澄。と。云

三光有影誰能勤
 萬事無根只自分
 雪隱鷺鷥飛始見
 柳藏鸚鵡語方聞
 月水奇縁 卷之三 畢

